

第二篇 山中御生活のこと
八、聖山心境 その一

八日 身延山御書（定遺 1915）

誠に身延山之栖すみかは、ちはやふる神もめぐみを垂あまくたれ天下りましますらん。心無キしづの男おしづの女めまでも心を留めぬべし。

哀レを催す秋の暮には、草の庵いおりに露深く、檐のきに集すだ多く蜘蛛さぎかにの糸玉つらぬを連つらぬき、紅葉こうよういつしか色深いろふかうして、たえだえに伝かけいふ懸樋かけいの

水に影を移せば、名にしおふ龍田河たつたがわの水上みなかみもかくやと疑はれぬ。又後ろには峨々ががたる深山しんざんそびへて、梢こすえに一乗このみの果このみを結び、

下枝しづえに鳴く蝉こえしげの音こえしげ滋く、前には湯々しょうしょうたる流水たたらえ湛たたらえて実相真如やみはれの月浮よみはれかび、無明深重やみはれの闇晴やみはれて法性しづえの空に雲もなし。かかる

砌いおりなれば、庵いおりの内には昼は終日ひねもすに一乗妙典みのりの御法みのりを論談よし、夜は竟夜よもすがら要文誦持よもすがらの声のみす。伝聞へく釈尊すくたまじの住すくたまじ給すくたまじけん鷲峰じゆほう

を我朝わがちよう此砌このみざりに移し置キぬ。霧立ち嵐ちはげしき折々おも、山りに入りて薪ををこり、露深わき草をを分みて深谷おに下おりて芹ををつみ、山河やまかわの流れも

はやき巖瀬いわがせに菜ををすすぎ、袂たもとしほれて干ほしわぶる思ヒは、昔人丸ひとまるが詠えいける、和歌の浦もに藻汐しお垂たれつつ世をを渡ある海士あまもかくやとぞ

思遣ヒヤる。つくづくうきみと浮身ありさまの有様ありさまを案をずるに、仏メの法ヒを求給もとしに異ことなり。……（弘安五年八月二十一日）